

翼をはって

小柴資子



翼をはって 小柴資子

日本放送出版協会

検印廃止

「翼をはって」

昭和49年6月5日第1刷発行

著 者 小柴資子

発行者 浅沼 博

印刷 三和印刷・近代美術

製本 協成紙業

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

郵便番号150 振替東京49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします

祈り（撮影 剣持加津夫）

書斎で



序文

小柴資子という、ひとりの女性が自らの生涯を物語った『翼をはって』を読んで思うことは、私にとって、彼女について何かを語ることが、実は彼女を通して裸の私自身を物語ることにはかならないという感慨である。彼女がえがくこれまでの生涯のうち、後半の大部分にかかわってきた私は、彼女に向かって月並みな言い方で「よくやった」とか、「大変だったでしょう」ということを許さない彼女の生き様のすさまじさに、まず圧倒されてしまう。

彼女の書いたものに私が序文を書くことの意味はどこにあるのだろうかと考えながら、彼女との二十年に近いかかわり合いのあとをふりかえてみた。そこには、残酷なまでに彼女への受容を拒み続けようとしてきた自分と、その自分を克服して精一杯あたたく迎え入れようとしているもう一人の自分との相剋の歴史があった。そして、この本を読んでみるまでもなく明らかのように、彼女自身は、そのような私の姿をとっくの昔に、裏の裏までお見通しなのである。小柴資子は、そのような鋭角的な感覚を身につけた人間らしい。

私どもの学校（日本社会事業大学、「通称日社大」）の一年コースに彼女を迎えたのは、もう十四年前のことになる。その一年の間で学んだことは「ビールとやきとりの味」ぐらいのものと笑いとばす彼女であるが、日社大に来る直前の東京都社会事業学校と日社大を合わせての二年間の学習によって、彼女は自らの厳しい体験を前向きに生かすべく、脳性マヒ者のケースワークに自分を同一化していったことがうかがわれる。ただ、専門の勉強を人並み以上にやったからといって、それがそのまま受けいれられて専門職業活動につながるものにはなりえないという厳しさが、他の障害者と同じく、いや脳性マヒ者の場合はそれ以上に大きく、現実の壁として立ちはだかつている。彼女がこの本をものすだけのあり余る才をもちながら、その学習したことを生かす場を与えられることなく十数年の間どれだけ苦労しなければならなかったか、そのことを本書は生々しくあらわにしてくれる。そしてこれは、私どもが共通の社会的責任において考えてみなければならぬ課題——障害者が人間らしく生きる権利をいかにして具体化するか——を、容赦なく私どもの胸元につきつけてくる。

彼女が一年のコースを終えて数年たってからのことであつたと思う。学内の学会で本書にも出てくる、ある調査の報告をしたいというので、彼女が報告の原稿を私のところにもってきたことがある。私は、これだけのものをまとめるのは大変なことだとは思つたが、学会報告としては物足りない点が多くあつたので、それを指摘して書き直してもらつた。書き直しは、たしか四度

に及んだが、彼女はとうとうそれをやり遂げた。字を書くことがどれだけ彼女にとって苦勞の多いことかを知っているのです、まことに残酷な要求のようにも思えたが、真理の追究の厳しさを彼女はよく理解して、この困難をのりこえてくれた。またある時は、にっちもさっちもいかない仕事の上での相談事（その一端が本書にもあらわれている）をもちかけられて、彼女ともども奈落の底に沈んでいくような、やりきれない思いに打ちひしがれたこともある。

それらのことを自力でのりこえて、ここまで翼をはって生きてきた彼女に拍手を送るとともに、これからの歩みの実り豊かならんことを祈るや切なるものがある。

一九七四年五月

日本社会事業大学

学 長 仲 村 優 一

目次

人間へのはばたき	9
町の中、木かげの中にも	13
その歩みは支えられ	18
満喫してもいいのかしらん？	27
伸びよ！ 雑草のごとくに	32
神の愛と試み	37
湯上りのビールとすしの味	41
大手を振って生きるのさ	46
我が青春に悔なきか	51
タナボタではないつもり	56
ニュー奥の細道	61
芽生え育ちて帰り来ぬ	67

ケースワーカーとなって

悲しき喜び

三食昼寝の別荘ぐらし

すし詰め病室新参者

延長延長持久戦

やどかり親分オベさいさい

貴女が私の人生を変えたのですよ

私だって克蘭ケなのに

ジレンマになりつつも

あなたはガンなのよ

「先進日本」のおとしだね

北九州とところどころ

当世流行の波のり越えて

「与三郎は女でござる」

健康って、すばらしいなあ！

僕の病名は「惱性マヒだって！」	135
弱い「性」への悲しみ	138
七〇年安保と基地の街	142
二十年前の福祉対策の中で	150
明け行く歴史のあかつきの中で	155
職場は失われても	159
真実に求めたいものは	163
肩なんていからせたくはないけれど	166
不惑の青春、夢にもゆ	172
なぎさの砂山	180
翼をはって	186

人間へのはばたき

すごいエアポケットだった。今、配膳されたばかりの食卓のスープが、あたりかまわず飛び散ってしまい、機内は一時にざわめきの色が濃くなってきた。シベリア大陸の上空にあった気流の関係によるものとアナウンスされたが、やはり気持ちの悪いものではなかった。二十四日間のヨーロッパの旅をおえ、帰国の途にある私の胸の中は、さまざまな思いで一杯であった。

デンマークをふり出しに、オランダ、イギリス、フランス、スイス、そしてフィンランドの各国を歩いて来た私には、この時代にあつて、誰もが飛び立って行く外国へのいわゆる「観光旅行」とは異なっていた事に多少なりとも、優越感を覚えていたのであった。

先に相当の話題を生んだ「車いすヨーロッパひとり旅」とはいかないまでも、十二才までは全く歩くことも出来なかった私が、いかに「海外旅行ブーム」とはいえ、よその国へまで足を伸ばせるなどとは考えてもみなかったことだった。それが、実現されたのだから、感無量の思いとなるのも当然のことかもしれない。

私を送り出して下さった多くの人々の支え。その方々に報告し、その目的使命を全うするまでは、飛行機事故等で死んではならないと、一瞬、エアポケットにぎくりとさせられたのであった。「福祉国家」と銘打つ今日の日本の社会において、まだまだ身障者への施策や施設の不備を

思い、いつのころから理想の施設を心に計画していた私の念願が、多くの方々のご好意によって迎えられ、先ず、ヨーロッパ各国の施設、その他の実状を把握して来ることとなり、同行の七名と共に出かけたのであった。

旅先のホテルで、母校、日本社会事業大学の学長仲村優一教授とご一諸になり、先生の労を仰ぎつつ各地の身障者施設を訪ねることが出来、実に大きな収穫を得ることが許されたのであった。

言葉の不自由さも、先生に通訳をして頂いたことによって、心も通じ合い、各地の身障者や施設の職員達の現状を知ることが出来、彼らの悩みも伺い知って、日本の障害者がひとり、悩んでいるのではないことをも知らされ、「地球は一つなのだ」と強く教えられる思いであった。

もちろん、「うらやましく」思ったことも数々あった。デンマークのコレクション・ハウス、オランダのヘット・ドルプ、そして、イギリスの「脳性マヒ者協会」の経営する数々の施設。物質的な設備には、驚くよりも、むしろ、日本の施設の方が優れていると思われるものが多かったが、肉眼に見ることの出来ない何かがそこに強く流れていることを心にひしひしと感じさせられたのだけは、とても大きな収穫だった。

すべての障害者を「人間」として尊重している国家の施策と国民の意識を、肌を通して見せつけられた思いがするのであった。生活権の保障も確立されていない我々日本の身障者に、いかに物質的に完備された施設が増設されても、魂にふれるものが欠如している限り、真の幸福を得る

ことは出来ないのかもしれない。

日本に生きてきた、否「生きている」身障者達は、この社会から真に「人間」として尊重され、認められているだろうか。もし「人間」として認められているのならば、同情やあわれみの眼で見たり、押しつけがましい態度を示せるはずもないだろう。しかし、現在の日本の社会は、身障者に対して「同情」や「あわれみ」を示し、「やってやる」「してやる」の態度を取り、それが身障者への理解や関心だと思って優越感を覚えている人々が少なくないのだら始末がわるい。

自分達と同じ仲間なのだと思っている人がいない故に、身障者に対して特殊な違和感を持ってしまうのらしいが、私にしてみれば、健康者というよりもことごとく身障者に「同情」や「あわれみ」を寄せてくれる人ほど、ご自分の能力を知らない人のようにみえて、おかしくてならない。

「汝、自身を知れ！」自分自身のことも知らずして、他人のことをとやかくいう人が多いが、その中でも特に身障者となると強く出て来るらしく、ある一人の友人は私に対して、「貴女は自分の能力の限界を知っているの？」と偉そうに忠告してくれるが、そんな忠告を耳にすればするだけムカムカとしてくるのは、私の高慢さ故であろうか。

真実に理解もしていないで、中傷したり押しつけがましい態度で接してくる人々の中に生きている私であれば、自分の能力位は知っているつもりである。「限界」よりも「発揮」出来ずに悩

んでいる私に「限界を知れ！」とは何事であろう。外見のみで尺度を計る人は、身障者の「人間尊重」どころか、身障者を「人間」としてみてはいないのが現実なのだ。

あれから、もう十三年にもなるが、私が『その歩みはおそくとも』を処女出版した時、それを記念して盛大な祝賀会を開いて下さったのだったが、集まって下さったのは、日頃から私を愛し、私を理解して下さっている百名近い師や友であった。

そんな師や友らであれば、誰ひとりとして世間一般の人々のように身障者への「同情」や「あわれみ」の言葉どころか「おほめ」の言葉すら、かけて下さる人はいなかった。

そんな方々ばかりを選び、師や友としてお交りいただいている私の性格が「類は友を呼ぶ」のかもしれないが、見事にお世辞の「お」の字もなく私を俎上にのせ、最初から最後まで爆笑の連続の会であったことを覚えている。その中で、現在お茶の水女子大学の教授をなさっている田口恒夫先生のヒューマニティに富んだお言葉が思い出されて来る。

「彼女が、この動かぬ手で書いたと思われるこの本を見て、実は驚いたのです。長年、医者として脳性マヒの患者さんに付き合ってきたが、脳性マヒの者が、人間であるとは思いませんでした。この本を手にして初めて、彼らも人間であったことに気が付きました、というよりは彼女自身が今、自ら『脳性マヒ』患者も人間であることを証明してくれたのです」

町の中、木かげの中にも

羽田を発って十八時間目にヨーロッパの玄関、デンマークのコペンハーゲンに着く。

世界中の子供の心を今もお、とらえ続けている童話の巨匠アンデルセンを生んだ国だけに、何となく心にゆとりを与えてくれるものを感じさせられるのである。紙くず一つ落ちていない公園と清潔そうな公衆便所。そこをのぞいただけで、その国民性が伺われて来る思いがするのであった。

そして、訪れた身障者施設は市の中心部の街の中であって、実に私の理想としていた、身障者の「ケアー」つきのアパートであった。

整肢療護園の小池文英先生よりアポイントメントを取っていただいていたため、チーフの方が快く迎えて下さり、懇切に説明して下さったが、身障者だけが、世の除け者として一カ所の片田舎に押しやられるのではなく、地域の人々と共に生活出来るようにという配慮のもとに、国立ではないが、首相自らが卒先して建設してくれたという高層マンションであった。

食事はレストランでまかなってもらい、日常動作もヘルパー達が常時やってくれるというコレクティブ・ハウス。一人一人の障害者がプライバシーを確保しつつ、地域社会の中に生きてゆける姿は実にうらやましかった。

2DKから3DKの住居を訪れ、中を見せてもらったが、室代と食費を五万円余支払ってもなお余裕があるらしく、書斎には日本の大学教授並みの書物が飾られてある優雅な生活状況が、私の眼に印象深く映るのであった。働くことの出来ない重症者には、月々十万円相当額の年金が支給され、その中から各人が個々に、その住居費と食費を施設側に支払っているとのシステムであった。

月々十万円の年金と聞けば、日本の身障者達は誰もが、よだれを流してうらやましがることであろうが、現代の日本においても、施設へ入所している者には、国や地方自治体から、それに匹敵する程度の措置費が出されている。しかし、日本の場合は、その金額が障害者自身の手を通さずに直接に施設の経常費として入ってしまうため、障害者自身は、そうした恩典のあることすら知らずにいる者も多く、また、中にはそれを悪用している施設も出て来るのだが、そこにも日本の施策自体が障害者の人格を認めていない欠陥があるように思えるのである。

しかし、その措置費を障害者自身が手にしたところで、書物など買える余裕などあるはずもなく、「お前達を養ってやっているのだぞ！」という押しつけの施策にすぎず、そこに日本とデンマークとの相違点がうかがわれるのであった。

オランダやイギリスでも同じことがうかがえた。オランダのヘット・ドルプとは身障者の村であった。手足の機能を損失した障害者達にも「生への使命と喜び」を与えようと國中の人が一丸となって、募金をし、建設された障害者の村であった。十年ほど前のある日、一日を通してテレ